

ドーン・クレイさんとアンドレア・クレンパさん 日米対話交流イベント（於：立命館大学平和ミュージアム）



9月4日、立命館大学で行われたドーン・クレイさんとアンドレア・クレンパさんを迎えて行われた日米対話交流イベントは、かねてから同ミュージアムが進めている「3.11 後の平和博物館の展示内容の改善と国際ネットワークの構築」プロジェクトの一環として、『元米捕虜の娘さんたちとの対話』と銘打って計画したものです。

交流会に先立ってお二人は立命館平和ミュージアムを英語の専門ガイド付きで見学

し、空襲・原爆・731部隊などの展示も見ました。頷きながら聞く様子に説明ガイドさんも励まされたそうです。見終わったドーンさんは『戦争は破壊に次ぐ破壊。勝者はいない。若者の笑顔が眩しい。』と述べられました。

会が始まると最初に司会の山根和代副館長がプロジェクトの趣旨を述べられました。その後、中尾より映像も交えてバターン・コレヒドール戦線とバターン死の行進・捕虜収容所・ヘルシップ（地獄船）による日本本土や中国の奉天収容所へ捕虜移送等の解説をしたのち、お二人より話をしてもらいました。

お二人は先に渡してある以下のような質問事項に答えるような形で話をすすめました。

●いつ父親が捕虜であったことを知ったか。●父親は捕虜体験を話したか。●家族への影響について。●日本政府の態度についてはこれまでどう思ったかなど。

ドーンさんがお父様のトラウマから受けた辛い話をするときには、アンドレアさんと私がしっかりと肩を支えておりました。その話の中では捕虜たちは様々なトラウマを抱えており、米政府からは収容所での体験を語るなという命令があったため、心理的な抑圧が強かったという。その影響で家族に対しても多くを語れず、語れるようになるまでに相当の時間がかかった事など、場合によっては子供への精神的な虐待をする父親になったことなどが語られました。ドーンさんの父親は藤崎一郎駐米大使が元捕虜に対してお詫びをした時、涙を流したそうです。（筆者注：日本政府は「謝罪」の単語は使わない。Apologyの正式訳は「お詫び」。このお詫びについて不満な捕虜の方もたくさんいる。謝って欲しいという気持ちは強く、毎年招聘の度に招聘者への日本側の挨拶の言葉が注目される。）

731部隊の実験の影響（筆者注：ドーンさんの父親は奉天収容所に収容中、病院に入院させられ、投薬後、すっかり体調が変わってしまったことから、近くにあった731部隊に人体実験をされたのではないかと疑っていた。）についても娘のドーンさんは何かに堪えるように、それでも「いわねばならない」との思いに駆られたように父親のことを話してくださいました。

更にお二人に日本への思いを聞いたところ、国民を恨むのではなく、戦争という悲しい歴史に原因があり戦争を二度と起こさないことの大切さを話された。

その後、休憩を挟んで参加者の質問に答え、原爆の質問についてはドーンさんとアンドレアさんは、あれは謝るべきことだと思おうと言われ、原爆が捕虜を解放したというような、特に心配する議論にはなりませんでした。

最後に被爆二世でもある山根副館長が会をまとめてくださいました。何回か元兵士や捕虜の証言集会を開いたことがあるが、(筆者注：外務省招聘者の交流会は過去2回ほど平和ミュージアムで実施している)次世代の息子や娘たちがこんなに苦しむことがあったとは驚いた。今回の証言が一番印象的・衝撃的だと仰いました。来年は International Network of Museums for Peace「平和のための博物館国際ネットワーク」の世界会議があり、そのテーマが「戦争の記憶と継承」であることからすると、この交流会はそれに相応しい経験であったとコメントされていました。

会が終わったお二人は、話すことで精神的な肩の荷を下ろしたようでした。ドーンさんは『とても良い経験だった。これがどんなに意義のあることかわかる?』と仰いました。



また参加者も捕虜の次世代の証言は初めて聞いたらしく、「知らなかった」「もっと知りたい」「捕虜の子供たちの話を聞くことは捕虜体験の補充ではなく、それ独自に価値がある。」(20歳)などの感想を残していました。こうした感想には企画した側として大いに励まされました。

← 左より 中尾、ドーンさん、アンドレアさん

(報告：中尾知代さん 岡山大学教員)